



大夕焼け地球の裏側覗きにゆく

鈴木和枝

作者は夕焼けと同化している。夕焼けは、ただ沈んでいるんじゃない。向う側を覗きに行っているのだ。童心は年齢に関係なく、詩につながるもの。



ニセモノの前歯こはごは林檎食ふ

堀川明子

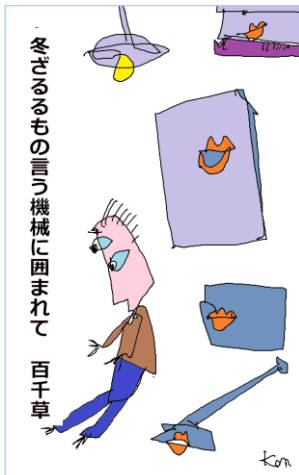
林檎を齧って前歯がポキリなんてことになるやも。その心配を正直に書いたね。それでは選者も一句。「大胆に林檎齧って歯のポロリ」。



美しいけれどもしやの毒茸

吉川正紀子

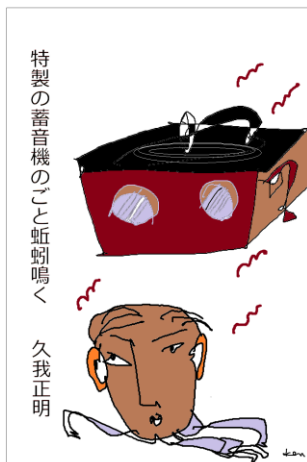
毒茸は華麗で魅惑的。妖しい魅力は誰彼を騙すためと気付くにはそれなりの人生経験が必要。あくまで「毒茸」のことだが女性を重ねるのも可。



冬ざるるもの言う機械に囲まれて

百千草

日常生活に「もの言う機械」が登場して久しい。最初こそ違和感もあったが、いつしか慣れて便利ささえ感じる。しかし、その慣れこそが寒々しい。



特製の蓄音機のごと蚯蚓鳴く

久我正明

季語の「蚯蚓鳴く」は、実は蚯蚓ではなく「オケラ」の鳴き声だとか。作者は「特性の蓄音機」の音と思った。知識や固定観念でなく感性で勝負。



さまざまなのは幻色葉散る

井口夏子

俳句の素晴らしさは、わずか十七音で哲学を語れること。眼前の自然を見つめ、来し方を顧みて、我が人生を一句に総括できるのである。